

アガサ・クリスティと第一次世界大戦

志 渡 岡 理 恵

1. はじめに

Agatha Christieは、19世紀末から20世紀前半のイギリス社会を大きく変えた3つの戦争を体験している。ボーア戦争(1899-1902)と第一次世界大戦(1914-1918)と第二次世界大戦(1939-1945)である。当時イギリスの植民地だった南アフリカが戦場となったボーア戦争では、アガサの兄が志願兵として戦地に赴いた。彼女が24歳の時に勃発した第一次世界大戦には、結婚したばかりの最初の夫で英国航空隊員のArchibald Christie(Archie)が出征した。アガサ自身は故郷であるTorquayの病院で最初はV.A.D.、すなわち篤志看護婦として、しばらくしてからは薬剤師として働いている。すでに作家としての名声が確立していた第二次世界大戦時には、空襲を受けながらも執筆を続ける一方で、再び薬剤師として病院に勤務した。この時、再婚相手であるMax Mallowanは北アフリカで空軍関係の仕事に従事し、一人娘のRosalindの夫は出征したまま帰還することはなかった。

このように、アガサ・クリスティは兵士の家族という立場でこれらの戦争を体験したわけだが、彼女が60歳の時から15年間にわたって執筆した自伝では、時を経て戦争体験をある程度冷静なまなざしで振り返りながら、戦争そのものの意味やそれが自分や社会に及ぼした影響を問い直し、あらためてこの体験を自分の人生の中に位置づけようとする作業が行われている。悲しみや苦しみに耽溺すること、心の闇を生そのまま曝け出すことを実生活においても、作品においても、おそらく好まなかったアガサ・クリスティの語り口は淡々としていて、時にはユーモアも交えられているが、苦しみを正視することを避けようとする自己防衛的な仕草も時折見られる。

第一次世界大戦中に篤志看護婦や薬剤師として働いたことが探偵小説を書くきっかけとなったというこの世界的なミステリー作家は、戦争をどのように語っているのだろうか。本論は、アガサ・クリスティの自伝の中の第一次世界大戦に関する記述を他の資料と照らし合わせながら、篤志看護婦としての経験を中心に、彼女の戦争体験を社会・文化的コンテクストの中で理解しようとする試みである。

2. ボーア戦争—最後の「古い戦争」

ボーア戦争は、1899年から1902年にかけて南アフリカでボーア人とイギリス人の中で戦われた戦争で、その原因は、金鉱から得られる莫大な富に目をつけたイギリスが侵略を行ったことだと考えられている。イギリスは世界各地でこのような帝国主義的侵略を行っており、イギリス国民はこの戦争をそのような長い植民地支配の歴史のコンテクストの中で捉えていたように思われる。例えば、アガサ・クリスティは自伝の中で、ボーア戦争をはじめとする植民地でしばしば起こる衝突を “large army exercises, as it were; the maintenance of power in far places”(II 7)と表現し、第一次世界大戦とは全く異なる類の戦争だったと述べている。

3つの戦争を体験した後で自伝を綴るアガサ・クリスティの目には、ボーア戦争と第一次世界大戦の間にはくっきりとした分断線が見えている。

The Boer War, I suppose, was the last of what one might describe as the ‘old wars’, the wars that did not really affect one’s country or life. They were heroic story-book affairs fought by brave soldiers and gallant young men. They were killed, if killed, gloriously in battle. More often they came home suitably decorated with medals for gallant feats performed on the field. They were tied up with the outposts of Empire, the poems of Kipling, and with the bits of England that were pink on the map. It seems strange today to think that people – girls in particular – went around

handing out white feathers to young men whom they considered were backward in doing their duty by dying for their country. (I 100)

ボーア戦争が「古い戦争」というのは、後の2つの世界大戦とは異なり、自国や自分の人生が直接巻き込まれるような戦争ではなかったということである。それは遠い場所—大英帝国の辺境—で勇敢な若者たちによって戦われる英雄物語の中の出来事のようなものだった。戦死した兵士の遺体は勲章のメダルで華々しく飾られ、祖国に戻ってくる。

ボーア戦争前後の兵士を描いた広告の数と種類の多さに注目し、ボーア戦争を「一つの文化的事象」(419)としても捉える必要性を説く田中孝信は、「新聞広告とボーア戦争」において、この戦争時には理想化された兵士像がさまざまな製品の販売促進に利用されたと指摘している。田中によれば、「兵士像は、清潔・健康・若さと結びつき」、「秩序・制御・文明の象徴としての役を果たすように」(422)なった。例えば、Monkey Brand 石鹸の広告からは、清潔さのイメージを帯びたイギリス兵士が「不潔なボーア人を打ち負かして」、「アフリカの地に清潔さをもたらす」(425)というメッセージが読み取れる。田中の分析により浮かび上がってくるのは、ボーア戦争が、イギリス国内で表象される際には生々しい悲惨な現実をそぎ落とされ、理想化された勇敢な兵士像によって美化された可能性である。こうして流通した戦争イメージが、アガサ・クリスティの例に見られるように、ボーア戦争を物語の中の出来事のようなものとして捉える原因のひとつとなったのかもしれない。

戦争中の少女たちにまつわるエピソード—戦争に志願しない青年を「国のために死ぬ」義務を果たそうとしない臆病者として軽蔑したという話—もまた、そのような戦争イメージが生んだ効果のひとつと考えられる。強烈なむごたらしい現実をそぎ落とされ、美化された戦争のイメージしか見ることのない少女たちは、兵士たちが実際にはどのような過酷な状況に置かれ、どんな思いで死んでいくのかを完全には理解しないまま、戦争に協力することになる。若桑みどりは、戦争ポスターを分析した論文の中で、

戦争において女性に最も期待されたのは男性を鼓舞して戦争に向かわせる扇動者の役割だったと述べている。若桑は、女性たちは「女神」として、「母親」として、「セクシーガール」として、兵士を癒す「看護婦」として、「男らしく戦う男らを興奮して応援する大観衆」(93)であり、「家父長制における性別役割の、戦時における効果的なつかいかたを知っていた」(94)国家によって利用されたのだと分析する。前線で戦闘に加わらない人々は、戦争を表象したものを通して戦争を理解する。そして時には、アガサ・クリスティの自伝の少女たちのように、自らの行為によって美化された戦争のイメージを強化し、戦争に加担することもある。時が経過して自伝を書く老年のアガサ・クリスティには、当時の人々の振る舞いが奇妙に感じられることになるのだけれども。

美化されたイメージに彩られたポーア戦争とは対照的に、第一次世界大戦は、その桁外れの死傷者の数と身近さによって、開戦直後から当時のイギリス国民にこれまで経験したことのない恐怖と衝撃を与えることになる。そのような時期に結婚し、作家としての第一歩を踏み出したアガサ・クリスティに、第一次世界大戦はどのように作用したのだろうか。

3. 第一次世界大戦—未曾有の惨禍

3つの戦争の中でアガサ・クリスティの人生に最も大きな影響を与えたのは、やはり第一次世界大戦だろう。彼女は、実生活では軍人の妻として常に戦況を気にしながら生活した。作家としては、篤志看護婦や薬剤師として働いた経験により豊富な毒薬の知識を得て、それが推理小説を書くきっかけとなった。ベルギーからの亡命者たちの姿は、かの有名なベルギー人の探偵Hercule Poirotを生み出すヒントとなる。もし第一次世界大戦がなかったら、ベストセラー作家アガサ・クリスティは誕生していなかったかもしれない。彼女にとって人生の転機となった最初の世界大戦の始まりをアガサ・クリスティは次のように語っている。

When, in far off Serbia, an archduke was assassinated, it seemed such a faraway incident – nothing that concerned us. After all, in the Balkans people were always being assassinated. That it should touch us here in England seemed quite incredible – and I speak here not only for myself but for almost everybody else. Swiftly, after that assassination, what seemed like incredible storm clouds appeared on the horizon. Extraordinary rumours got about, rumours of that fantastic thing – *War!* But of course that was only the newspapers....It was all rumours – people working themselves up and saying it really looked “quite serious” – speeches by politicians. And then suddenly one morning *it had happened.*

England was at war. (I 272)

第一次世界大戦のきっかけとなった暗殺事件は、ボーア戦争と同じように、セルビアという遠い国で起こった、自分たちとは何の関係もない、物語の中の出来事のような事件で終わるはずだった。ところが、瞬く間に、まるで嵐のように、事件はイギリスを巻き込む戦争へとつながっていく。この一節から、当時の一般大衆にとっていかにそれがめまぐるしい展開だったのかがよく分かる。

開戦当初はベルギーに侵攻したドイツを撃退する「聖戦」に高揚したものの、イギリス国民はおびただしい数の死傷者を出し続けるこの戦争のすさまじさに次第に追い詰められていく。Thomas Hardyが詩人としてボーア戦争と第一次世界大戦にどのように関わったかを考察した福岡忠雄は、第一次世界大戦が「ハーディに与えた衝撃は深刻で」、「いかに74歳の高齢だとはいえ、ボーア戦争の時のような、距離を置いた態度で慨嘆するだけではすまなくなった」(31)と述べている。第一次世界大戦は、ボーア戦争とは明らかに性質の異なる未曾有の戦争だったのである。

他の人々と同様、アガサ・クリスティも状況を十分に理解する余裕のないまま、展開の予想のつかない戦争に巻き込まれていく。まず、婚約中だった航空隊員のアーチャーから電報が届く。急いで駆けつけると、わずか30分

間の別れの後、アーチャーはフランスへ出征する。ドイツ空軍の強さは広く知れ渡っており、2人とも生きて再び会えることはないと思っていた。アガサは別れた日の夜のことを次のように回想している。

I remember going to bed that night and crying and crying until I thought I would never stop, and then quite suddenly, without warning, falling exhausted into such a deep sleep that I did not wake till late the following morning. (II 8)

泣き疲れて、翌朝は寝坊してしまったという後半部分には、戦争を語る際のアガサの特徴のひとつ—悲しみや苦しみの最中にあっても無意識のうちに生きていこうとする人間の本能のようなものを描こうとする態度—があらわれているように思われる。

3ヶ月後、短い休暇をもらったアーチャーに会うために、アガサは母親と一緒にロンドンに向かう。その時の戦況は“Already the casualties had startled and surprised people. A lot of my own friends had been soldiers, and had been called up at once. Every day, it seemed, one read in the paper that somebody one knew had been killed”(II 15)というアガサ自身の言葉にあらわされているように、大変厳しいものであった。前線と銃後という別々の場で戦争を体験し、再会したアガサとアーチャーは、これまでとは全く異なる新しい経験をしたせいで、お互いにまるで見知らぬ者同士であるかのような違和感を覚える。3ヶ月間という時間は、2人をまるで別人のように変えていた。

It was only three months since Archie and I had seen each other, yet those three months had been, I suppose, acted out in what might have been called a different dimension of time. In that short period I had lived through an entirely new kind of experience: the death of my friends, uncertainty, the background of life being altered. Archie had had an equal amount of new experience, though in a different field. He had been in the

middle of death, defeat, retreat, fear. Both of us had lived a large tract on our own. The result of it was that we met almost as strangers. (II 15)

アガサの新しい経験の大きな部分を占めていたのは、篤志看護婦として働いた経験である。当時、篤志看護婦はアガサのような中産階級以上の女性たちが戦争に協力するために選ぶ最も一般的な選択肢だった。銃後の女性たち、とりわけ少女たちは、傷ついた兵士の世話をする中でさまざまな知識や技能を身につけ、精神的にも肉体的にも鍛えられていった。そして、母親の世代とは明らかに異なるタイプの女性へと成長していく。アガサ・クリスティの作品に登場する、事件を解決する知恵と勇気と体力をあわせもった新しい少女像は、この経験を土壌にして生まれたのではないかと考えられる。実際、*The Man in the Brown Suit* (1924)の女主人公は戦争中に病院で働いた経歴を持っているし、*The Secret Adversary* (1922)については、“I conceived the idea of having a pair of this kind – a girl who had been in the A.T.S. or the V.A.D. and a young man who had been in the Army” (II 71)とアガサ自身が述べているように、構想の最初の段階で主人公は元篤志看護婦と決められていたのだ。

4. V.A.D.ータフな少女

アガサ・クリスティは自伝の中で、篤志看護婦として働いた経験の記述に多くのページを割いている。それだけこれは彼女にとって大きな意味を持つ経験だったということだろう。V.A.D.は、赤十字などの援助を受けて1909年に組織され、主な構成メンバーは中産階級と上流階級の女性たちだった。篤志看護婦は当時の少女たちにとって憧れの存在だったようである。例えば、20世紀初頭に約50冊の女学校小説を書いた人気作家 Angela Brazil の *A Patriotic Schoolgirl* (1918)には、篤志看護婦として働く従姉に憧れる女学生が登場する。Brackenfield Collegeの寄宿生である Marjorieは、父親と兄たちが第一次世界大戦でフランスに出征していることもあって、愛

国心の強い少女である。

Marjorie was intensely patriotic. She followed every events of the war keenly, and was thrilled by the experiences of her soldier father and brothers. She was burning to do something to help – to nurse the wounded, drive a transport wagon, act as secretary to a staff-officer, or even be telephone operator over in France – anything that would be of service to her country and allow her to feel that she had played her part, however small, in the conduct of the Great War. (51)

戦況を熱心に調べ、父や兄たちの軍事行動に思いを馳せるマージョリーは、自分だけが女学校で何もせずにじっとしていることに我慢できない。せめて女性に認められている戦争協力の一端だけでも担いたいのに、年齢制限があって、応急手当の授業を受けることくらいしかできない。そんなマージョリーにとって、篤志看護婦として働く従姉 Elaine は憧れの的である。

“I wish I were old enough to be a V.A.D.!” sighed Marjorie. “I’d love it better than anything else I can think of. It’s my dream at present.”

“I enjoy it thoroughly,” said Elaine; “though, of course, there’s plenty to do, and sometimes the Commandant gets ratty over just nothing at all. Have you St. John’s Ambulance classes at school?”

“They’re going to start next month, and I mean to join. I’ve put my name down.” (48)

仕事をとても楽しんでいるというエレインはたくましく、自信に溢れ、“... sometimes the Commandant gets ratty over just nothing at all” という言葉には余裕すら感じられる。この後、マージョリーはエレインに案内されて病院を見学するが、病床の兵士たちをきびきびと見て回り、ひとりひとりに明るく声をかける従姉の働く姿を目の当たりにして、彼女の篤志看護婦へ

の憧れはますます強くなっていく。このように、第一次世界大戦中の女学校を舞台にしたこの小説では、ヴィクトリア時代の「家庭の天使」予備軍とは別のタイプの少女像が肯定的に描かれている。

アガサ・クリスティもフランスへ出征する婚約者を見送った後、すぐさま篤志看護婦として働くために自宅近くのV.A.D.支部へと足を運んだ。アガサと同じように役に立ちたいと願う女性は大勢いて、競争率は非常に高かったようである。

The competition to get into the hospital (converted from the Town Hall) and do some nursing had been great. For strictly nursing duties those chosen first had been mostly the middle-aged, and those considered to have had some experience of looking after men in illness. Young girls had not been felt suitable. (II 8-9)

殺到する志願者の中から実際に兵士の看護にあたる看護婦として優先的に選ばれたのは、中年の女性たちだった。中産階級の主婦は「家庭の天使」として夫や息子の看護に慣れていると判断されたからである。しかし、使用人のいる家庭の主婦の看護とプロの看護婦の仕事の間には大きな差があった。病院での負傷した兵士の看護は、ただ優しい言葉をかけながら、枕を直してあげるだけではないのだ。嘔吐物を拭き取ったり、尿をとったり、虱だらけの髪を梳いたりすることが毎日の仕事の大半を占める。ほどなくして要求される仕事内容に辟易した中年の女性たちは、病院を去っていく。アガサは彼女たちを“the idealists”と呼び、“So the idealists gave up their tasks with alacrity: they had never thought they would have to do anything like *this*, they said” (II 9)とからかうような口調で書いている。

こうして最初はふさわしくないと判断された“hardy young girls” (II 9)が兵士の看護にあたることになる。掃除を担当するward maidだったアガサも、12ベッド2列の兵士の看護を任される。“From the beginning I enjoyed nursing. I took to it easily, and found it, and have always found it, one of the most

rewarding professions that anyone can follow” (II 11)という言葉から分かるように、彼女は看護の仕事が性に合い、やりがいを感じていたようである。とはいえ、さすがに初めて手術に立ち会った時には失神してしまう。だが、すぐにそれを克服するコツを体得する。

The next one she sent me into was quite a short one, and I survived. After that I never had any trouble, though I used sometimes to turn my eyes away from the original incision with the knife. That was the thing that upset me – once it was over I could look on quite calmly and be interested. The truth of it is one gets used to anything. (II 14)

ただやみくもに怖がるのではなく、手術のどの部分に自分が最も心を乱されるのを見極めたうえで、その時だけ目を逸らすという対処法を考え出し、実行するのを可能にしたのは、冷静な自己分析能力と、逃げ出さずに踏みとどまろうとする意志、強い責任感だろう。アガサは裕福な家庭に生まれ、乳母や料理人、複数のメイドがいる屋敷で何不自由なく育ち、それまで働いたことはなかった。淡々とした語り口ではあるものの、“The truth of it is one gets used to anything” という部分からは、彼女がこのようにして慣れない状況に適応すべく、あらゆることに忍耐強く取り組んだことがうかがえる。

その努力は、アガサをたくましく、他人の痛みの分かる有能な看護婦へと成長させていく。見習い看護婦が切断された足を焼却炉へ投げ入れる仕事をひとりでやるよう命じられた時、アガサは自ら進んでその手伝いをする。

I remember a young probationer who had been assisting in the theatre and had been left behind to clear up, and I had helped her take an amputated leg down to throw into the furnace. It was too much for the child. Then we cleared up all the mess and the blood together. She was, I think, too

young and too new to it to have been given that task to do alone so soon.

(II 22)

彼女の脳裏には、最初の手術の時に失神してしまった自分の姿が浮かんでいたのかもしれない。“She was, I think, too young and too new to it to have been given that task to do alone so soon” という彼女が年少の少女に対して示した思いやりは、アガサ自身、多くの凄惨な場面に立ち会い、苦しい思いをしてきたからこそ生まれたものだろう。

篤志看護婦の仕事内容を説明する時にはこのような痛々しい光景が描かれることはあるけれども、アガサ・クリスティの自伝には苦しむ兵士の描写は不自然なほどない。敢えてそれを避けているようにさえ感じられる。彼女が語るのは、体温計を暖房器具にあてて体温をごまかそうとする悪戯好きの兵士や、同じ内容のラブレターを3通代筆してほしいとねだる茶目つけたっぶりの兵士たちの姿である。おそらくこの選択は、重苦しさをユーモアで和らげようとするアガサの心性に起因しているのではないだろうか。最初の入院患者が病院に到着した時の様子も、以下のようにユーモアたっぷりに語られている。

Mrs Spragge, General Spragge's wife, the Mayoress, who had a fine presence, stepped forward to receive them, fell symbolically on her knees before the first entrant, a walking case, motioned him to sit down on his bed, and ceremonially removed his boots for him. The man, I must say, looked extremely surprised, especially as we soon found out that he was an epileptic, and not suffering from war wounds of any kind. Why the haughty lady should suddenly remove his boots in the middle of the afternoon was more than he could understand. (II 9)

患者の前に跪いて、恭しくブーツを脱がせる恰幅の良い市長夫人。驚く患者。それもそのはず、彼は戦争で傷を負ったわけではなく、癲癇で入院し

たのだから。まるで4コマ漫画のようである。このようについ微笑んでしまうようなエピソードを挿入するのは、暗く重い現実には押し潰されないようにするための一種の自己防衛的な振る舞いなのかもしれない。アガサは、自伝の別の箇所、古代エジプト王の史劇を書いた時、批評家からこれには十分なユーモアがないと言われて反省したことに触れ、“Egypt was just as full of humour as anywhere else – so was life at any time or place – and tragedy had its humour too” (II 141)と書いているが、どんな場にもユーモアを見出そうとする態度は、戦争中に身につけた生き抜くためのひとつの知恵だったのではないかと考えられる。

5. 終わりに

第一次世界大戦の終わりは、始まりと同じように突然やってきた。戦地から戻ってきた夫と暮らすために引っ越し、速記と簿記の授業を受けていたアガサは、講師から戦争の終結を知らされ、信じられない思いで家路につく。その時彼女が通りで見た光景は次のようなものだった。

I went out in the streets quite dazed. There I came upon one of the most curious sights I had ever seen – indeed I still remember it, almost, I think with a sense of fear. Everywhere there were women dancing in the street. English women are not given to dancing in public: it is a reaction more suitable to Paris and the French. But there they were, laughing, shouting, shuffling, leaping even, in a sort of wild orgy of pleasure: an almost brutal enjoyment. It was frightening. One felt that if there had been any Germans around the women would have advanced upon them and torn them to pieces. Some of them I suppose were drunk, but all of them looked it. They reeled, lurched and shouted. (II 51)

ありとあらゆる通りで踊り狂う女たち。それだけ苦しい戦争だったという

ことだろう。近くにドイツ人がいたら八つ裂きにしてしまいそうなほどの“an almost brutal enjoyment”に身をゆだねるその姿を見て、アガサは恐怖さえ感じる。間もなく彼女は次々と小説を発表し、売れっ子作家になっていくのだが、作品には退役軍人や亡命者など戦争にまつわる多くのものがとりこまれている。中でも、アガサ・クリスティの作品を魅力的なものにしている2つの要素—タフな新しい少女像と、悪意の極みとも言える殺人事件を軸に展開する物語に散りばめられたユーモア—には、彼女の戦争体験が深く関わっていたのではないかと考えられる。

付記

本稿は、平成24-25年度JSPS科研費による研究（挑戦的萌芽研究、課題番号24652063）「20世紀イギリスの『新しい少女』—女学校文化とガールガイド文化」の成果の一部である。

参考文献

- Brazil, Angela. *A Patriotic Schoolgirl*. London: Blackie and Son Limited, 1918. Print.
- Christie, Agatha. *An Autobiography*. 2vols. London: Agatha Christie Ltd/Planet Three Publishing Network Ltd, 1977. Print.
- Cohen, Debra Rae. *Remapping the Home Front: Locating Citizenship in British Women's Great War Fiction*. Boston: Northeastern UP, 2002. Print.
- Grayzel, Susan. *Women and the First World War*. London: Longman, 2002. Print.
- Hampton, Janie. *How Girl Guides Won the War*. London: Harper Press, 2010. Print.
- Hutchinson, John F. *Champions of Charity: War and the Rise of the Red Cross*. Oxford: Westview Press, 1996. Print.
- Jackson, Ashley and David Tomkins. *Illustrating Empire: Visual History of British Imperialism*. Oxford: Bodleian Library, 2011. Print.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. New York: Columbia UP, 1995. Print.
- Nelson, Claudia and Lynne Vallone, eds. *The Girls Own: Cultural Histories of the Anglo-*

- American Girl, 1830-1915*. Athens: University of Georgia Press, 1994. Print.
- Nicholson, Virginia. *Singled Out: How Two Million British Women Survived without Men after the First World War*. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Potter, Jane. *Boys in Khaki, Girls in Print: Women's Literary Responses to the Great War 1914-1918*. Oxford: Clarendon Press, 2005. Print.
- Sherry, Vincent, ed. *The Cambridge Companion to the Literature of the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2005. Print.
- Smith, Michelle. *Empire in British Girls' Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Stone, Gilbert, ed. *Women Workers of World War I*. Glasgow: Mansion Field, 2007. Print.
- 田中孝信「新聞広告とボーア戦争」、要田圭治・大嶋浩・田中孝信編『英文学の地平—テキスト・人間・文化—』、東京、音羽書房鶴見書店、2009年、419-44。
- 福岡忠雄「戦争詩人 トマス・ハーディ」、『関西英文学研究』第5号、日本英文学会関西支部、2011年、29-35。
- 若桑みどり「第一次世界大戦ポスターにみる女性表象のジェンダー」、『モード・オブ・ザ・ウォー』東京、印刷博物館、2007年、84-94。